

福島県現代詩人会

第9回 福島県現代詩集賞結果発表

第9回福島県現代詩集賞の受賞者を、次のとおり決定しました。

表彰式は2026年6月21日(日)13時05分より、郡山市ビッグアイ7階 大会議室1で執り行います。

《福島県現代詩集賞 正賞》

作者 大島 ^{かほ}芳 作品 借り物

福島県現代詩人会 会員 福島県会津若松市在住

《福島県現代詩集賞 審査員特別賞》

作者 大津 ^{きょうこ}恭子 作品 車座のララバイ

福島県現代詩人会 会員 福島県いわき市在住

作者 渡辺 ^{たかゆき}孝行 作品 悪の現在

福島県現代詩人会 会員 福島県福島市在住

2017年度に創設した福島県現代詩集賞は、当会の年刊アンソロジー（会員作品を集めた詩集冊子）から優れた作品を表彰するものです。今回より、次点や特定領域に秀でた作品に対して「審査員特別賞」を授与することとしました。

今回は、詩集を刊行したいわき地区会員の予備審査で上位5位（同票あり6作品）に対して、5月30日に本審査を行いました。

審査員：齋藤貢（会長）、岩田武昭（理事長）

天野行雄（詩集編纂実行委員長）わたなべえいこ（詩集編纂実行委員）

正賞の大島芳氏の作品は、東日本大震災で借りた物を返せないという、福島県民の、心情を丁寧に記しており、審査員全員が推しての受賞です。

審査員特別賞には、二作品が推されて、大津恭子作品は核家族化前時代への郷愁、渡辺孝行作品は現代の世界情勢でタイプが異なり、甲乙つけがたいことから、両作品ともに受賞としました。

借り物
大島 芳

故郷を追われて
借りた町に住んでいた
そこでは全てが借り物で
家も家具も服も、食べるものさえも
真新しいのにどこかよそよそしく
借りた家の中は
よそよそしいものと
ダンボールで溢れ返っていた
十三年目で
終わりから始まった町に移り住んだ
かつて故郷と呼んでいた町には
借りてきた土が盛られ
家が建ち
かつてそこを追われた人たちが

様々な住民票を持ち寄って
日常という芝居を始めた
芝居はいつ終わるのだろうか
借りたものはいつ
返せばいいのだろうか
不本意に住む場所を追われて
借り物の柵の中で管理されてきた
この命の持ち主は
本当は誰なのだろう
いつ、わたしに帰って来るのだろうか

車座のララバイ 大津 恭子

一人

また一人

縁側の大窓を越えてやってくる

祖母を上座に据え

各々が持ち寄った

選りすぐりの獲物を

卓袱台に置く

調理順は

暗黙の了解で決まっているのか

来訪順か

定かではないが

突然始まる

調理の基本は

さしすせそ

さして重要でもない話も

慎重に

速やかに

節度を守って

そばだてる

さて

本日のお題はいかに

ああ

このろくでもない部落の

素晴らしき車座のララバイ

こたつ布団にくるまって

今日も

私は瞳を閉じ

そっと

意識を手放した

悪の現在

渡辺 孝行

そんな時代もあったね とは
われらかぎりの歌であって
彼らにゆるされる言葉ではない

善をあつめて独裁者がうまれ

真実を歪め 偽り 騙り

人道の極悪を世界に強いる

悪とされたものは存在を否定され

善男善女がそれをよしとして

人間の歴史に殲滅の谷を刻む

民族といい国といい その不明を惧れ

無明の意の下に敵を狩り

人間性の殺戮に手を出し

われにかえって 明日はわが身と

凶悪のからくりが透けて見えたか？

振り返ってもだれもない

宙船に乗ってはじめて見た

このほしの善 平和の青さ

共生が生み出す 瑠璃の光彩

ぼくらはまだ 何かを

見落としているのだろうか

歴史は眠ってしまったのだろうか

きょう いま 世界は

神なく「創世記」するか

野蛮を競い合う原始にみち

右の悪は善とされ

左の理知は悪とされ

生きようとすれば矛盾もない？

だが 歎いてはならない

歎きは今の現在から ぼくを 切り離し

凡庸の悪に融かしこんでしまう

だが なにを どうすれば

このほしの団らんをまもることが出来るか

ゆるしてはならない悪が必要だ